

およそ能登守教経(のこのかみのりつね)の矢先に格助まはる者四段・体こそ形・ク活用・用なかり
 過去「けり」已
 くれ。矢だね格助のラ変・体あるほど射尽くして、今日を格助
 最後と格助や思はれけん、赤地の錦の直垂格助に、
(からあやをとし)上一・用
 唐綾緘格助の鎧格助を着て、いかものづくりの格助大太刀抜き、
(おほなぎなた)一・用
 白柄格助の大長刀格助の鞘格助をはづし、左右格助に持つて
(しんげ)一・用
 なぎ回り格助給ふ格助に、面格助を合はする者格助ぞなき。
⑤作者↓能登殿
 形・ク活用・用 四段・未 完了「に」用
 多く格助の者ども討たれにけり。新中納言、使者格助を立て
受身「る」用 過去「けり」終
 て、「能登殿、いたう罪な副詞作り四段・用給ひ終助そラ変・終。さり格助と
接助 (かたき) 係助 形容詞・ク・用(ウ音便) 四段・用 ⑤新中納言↓能登殿 接助 接続詞 格助
 てよき敵か。と格助のたまひ格助ければ、格助「さては大將
接助 形・ク活用・体 格助 ⑤作者↓新中納言 過去「けり」已
 軍格助に組めござんなれ。」と心得格助て、打ち物荃短に(くき)
四段・用(促音格助)
 取つて、源氏の舟格助に乗り移り、乗り移り、をめき
接助 格助 格助
 叫ん四段・用(撥音便)で攻め下二・用戦ふ。四段・終
(はうぐわん) 四段・用 接助 打消「ず」体
 判官格助を見知り格助給はねば、物の具形・ク活用・体のよき武者格助を
格助 ⑤作者↓能登殿 接助 格助
 ば判官かと目下二・用を格助かけて、馳せ回四段・終る。判官も格助
係助 係助 格助 格助
 先に心得下二・用て、面格助に立つ四段・体やうにはしけれ係助
格助 接助 格助 比況「やうなり」用 係助 過去「けり」已
 ども、とかく違四段・用ひて、能登殿格助に係助は組四段・未ま格助
接助 副詞 四段・用 接助 格助 係助
 尊敬「る」未
 れ格助ず。
 打消「ず」終

およそ能登守教経の矢面に立ち回る者はいなかつた。手持ちの矢をあるだけ射ち尽くして、今日を最後とお思いになったのだろうか、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧を着て、いかめしく見えるように作られた大太刀を抜き、白木の柄の大長刀の鞘を外し、(それらを)左右の手に持つて切つて回られなされると、正面切つて立ち向かう者はいない。多くの者たちが討たれてしまった。新中納言殿(平知盛)が使者を送つて、「能登殿、あまり罪を作りなさるな。そのようなことをするのに(戦つのに)ふさわしい敵か。」とおっしゃったところ、「それでは大將軍と組み討てといふのだな。」と理解して、太刀や長刀の柄を短く持つて、源氏の船に次々に乗り移り、わめき叫んで攻め戦つ。(能登殿は)判官(義経)をお知りなさらないので、身に着けたもの(鎧や甲など)の立派な武者を判官かと目をつけて、駆け回る。判官も先に理解して、能登殿の前に立つようにはしたけれど、あれこれと行き違つようにして、能登殿とは組まれなかった。